



¡OLE! スペイン各地での
エピソード④

Don Quijote, Vol.41 montado en un avión

texto : Takeshi Shimizu
fotos : Atsuko Yokoyama

「カルメン」の
舞台を訪ねて
みたが……

Sevilla

メリメ作「カルメン」や、ポーマルシェの戯曲「セビリアの理髪師」の舞台になったセビリアは、闘牛、フラメンコの本場です。1992年の世界万博を機に、街は大きく整備されました。(同じ年、北東のバルセロナではオリンピックが開催されています)

市の端を流れるグアダルキビル川は、コロンブスを始めとする大航海時代の立役者が、更には、約400年前、仙台伊達藩の支倉常長が足跡を印しています。私たちは最初にカテドラル、ヒラルダの塔を見学、続いてセビリア大学へと向かいました。

イスラム支配時代の大モスクを基礎として建てられたカテドラルは、ゴシックとルネッサンスの混合様式で、バチカンのサン・ピエトロ大聖堂、ロンドンのセント・ポール大聖堂と並ぶ、世界三大カテドラルとも言われています。カテドラルの鐘樓塔であるヒラルダの塔の高さは98メートル。地上70メートルの高さまで、周り階段とスロープで上ることができません。展望台からのセビリア市内の一望も素晴らしい。そこから歩いて10分ほどでセビリア大学へ。大学の建物は18世紀に建てられた旧王立煙草工場。訪問は名作「カルメン」の舞台を偲んでみたい、との思いがあったからでした。

—スペインを旅行中の作者メリメは、ふとしたことから今は獄中にいる山賊ホセを知る。ホセの語る懺悔録。それは衛兵だったホセがこの煙草工場に女工として働いていた娘カルメンと知り合い、その情熱に翻弄され、闘牛士や彼女の情夫、果ては彼女まで殺してしまう悲しい物語だった。奔放なジプシー女カルメンは、近代人の枠外に設定された人物だった。人間の本能の奥までえぐるような、時にドロドロとしたものを流しながら語られる男女の愛。それは、現実を越えたものでありながら、誰の心の奥にも潜んでいる感情、本能を、ホセとカルメンの言葉と行動を通して吐き出させている—

日本語訳は文庫本で100ページほどの短編ですが、凝縮された内容の濃さに惹きつけられたものでした。そんな物語を思い出しながら、今は大学の法学部となっている建物の事務室の女性に、ホセとカルメンの最初の出会いの場所を尋ねてみました。

ところが——。
「え! そんな話は知りませんねえ」との意外な返事。

「ホラ、『煙草工場の入り口で…』と、物語には書いてあるんですけど」
「じゃあ、きっとこの大学の正門のところじゃないかしら」
……………

